

県北 どらくろあ

第26号 2018年5月1日（毎月1日発行）

県北群星伝⑬ 郷土文化の案内人 あんないびと

ただ ゆうぞう
武田祐三 82歳（庄原市高町）



どら書房漫画ルームにて撮影

「文学部では、国史科がね、他核を担うなど、郷土史研究のに比べて競争率が低かったん 功績は大きい。」

歴史を研究するきっかけを 学部で、とりあえず日本史を 専攻したものの、とりわけ歴史に興味があったわけではな

武田祐三さんは高校の教員 生活を退職後、庄原市園文化 センター館長、庄原市文化財 保護審議会会長等を歴任。東 城町史や庄原市史の編纂の中 史に興味があったわけではな

が社会に出て人様の役に立てるだろうか。早稲田の校舎は新宿の繁華街に近く、勉学に集中できる環境ではなかったようだ。

大学院に進学した武田さんは、研究テーマに日蘭交渉史を選ぶ。そのためにはオランダ語を学ぶ必要があるのだが、教えてくれる場所がない。オランダ大使館に問い合わせても、そんなところはないという。仕方なく日本語・英語訳の文献を調べることになるのだが、このときの経験が後年の郷土史研究にも活かされている。

「やっているうちに、なんとかなるもんです」
難解な古文書も、あきらめずに他の資料や文献を調べると、必ず面白い発見があるという。

大学院を卒業した武田さんは、比婆郡口和町（現・庄原市口和町）の口南中学校に社会科の教師として赴任。そこで生涯の研究テーマである「荘園」と出会うことになる。中世の庄原市（合併後で口和町も含む）の荘園は、現在、七

つまで確認されている。
庄園研究の論文が認められて、平凡社や角川書店の地名辞典、吉川弘文館の「国史大辞典」に執筆している。
武田さんの高町にある自宅は、武田さんの母方の実家。その実家の総領である叔父が、太平洋戦争開戦後一週間にしてマレー半島で戦死、まだ二十四歳だった。叔父の故郷への想い、生まれ育った生家への想い……、武田さんが勤務地に自宅から通える場所を選んできた理由の一つである。

武田さんの著書に、地元史の歴史探訪の案内書がある。「しようばらー歴史と文学の町を歩く」（二〇〇〇年発行）、「芸備線ー中国山地の沿線物語、備後東城駅ー三次駅」（二〇〇四年発行）、「上野池ものがたりー広島県北の『桜の園』を歩く」（二〇一五年発行）の三冊。「しようばら」の巻頭の一文を紹介させていただきます。

歴史探訪の案内をするさいに手ごろな本の必要を感じ、江戸・明治時代の人たちが「ふところ」に入れ歩いた袖珍本（しゅうちんぼん）ほどの大きさのものを作ってみました。

写真のアンクルや構図が工夫されていて、臨場感がある。平易な語り口調で書かれた文

章を読んでみると、まるで現地で解説を受けているようだ。「しょうばら」の扉の写真で、武田さんの愛用のカメラ、ライカが、さりげなく紹介されている。

読み進めているうちに、自分が郷里のことをあまり知らないことに気づかされる。現在、庄原市民会館がある場所には、以前はわたし（記者）が通った小学校が建っていた。さらに時代を遡ると、明治十七年に県北初の近代学校として誕生した庄原英学校に行きつく。

備北丘陵公園の管理事務所が入っているビクター・センターは、その庄原英学校の校舎の写真を資料として、細部の復元に努めてできあがったものだという。そうした知識を得て眺めると、観光のための懐古趣味だと思っていた建物が、急に身近なものに見える。

「芸備線」では、東城と西城の地名の由来が理解できた。戦国時代に奴可郡東部に勢力のあった宮氏が勢力を拡大して、奴可郡西部に居城（大富山城）を移した。東部の守りとしては奴可郡東条に五品嶽城を置いた。これで東条は東

城になり、西城という地名も生まれた、といわれている。

芸備線が賑わっていた往時の写真やエピソードも紹介されていて、寂れてしまった駅の現状に作者も読者も詠嘆する。こうした近代のことも大きな歴史の一部として、記録しておく必要があるのだと、武田さんの三冊の著作を読んだと思った。

今度は、実物を見ながらじっくり散策してみたい。その歴史や謂れを知ることでも、まったく違った景色に見えるはずである。

武田さんは現在「庄原郷土史研究会」の会長を務めている。メンバーは十五、六人。事務局長の奥田虎昭さんは、格致高校時代に同好の仲間と「郷土史研究部」を立ち上げたほどの歴史好き。そのときの顧問が武田さんで、数年前に師弟コンビが復活した。

「活動は史跡巡りが中心です。部屋で研究会を開いても、人は集まりませんからね」

そう言って、武田さんは温和な笑みを浮かべた。次回作は「散策の旅」に、連れて行ってもらえるはずである。

新・図書館員ノート「思い出の一冊」②

「日本妖怪図鑑」、「世界妖怪図鑑」



生まれ育った場所が辺鄙なところで、近くには図書館も書店もなく、学校の小さな図書室と毎月買ってもらった学研の科学と学習、小学館の学年別雑誌が読書のすべてだった。

小学何年生のことだったか……。小学〇年生」のある号に妖怪の特集が載っていたのだ！ そもそも夏休みに放映の「あなたの知らない世界」は必

ず見るという怖いもの好き。まんまと妖怪の魅力に取りつかれてしまった。

そのころ好んで読んでいたのが、「妖怪図鑑」のたぐい。あまたの妖怪が、おどろおどろしい絵とともに紹介されている。

さて、すでに手に入らなくなっている本を、リクエストにより復刻してくれるサイトがある。そこで復刻されたのが『日本妖怪図鑑』、『世界妖怪図鑑』（佐藤有文／著・復刊ドットコム）だ。当時のままの妖怪たちに、テンションもあがる！ 私のような妖怪好きが世の中にはたくさんいるんだな！

ちなみに私の推し妖怪は「一件（くだん）」。世紀末に牛の体に人の顔という姿で生まれ、確実にあたる予言をしたのち死んでしまうという。残念ながら18年前には生まれたというニュースは耳に入らなかった。でも、どこかで……？

（三次市立図書館員によるリレーエッセイ、執筆者の似顔絵は有光館長作）



海音寺潮五郎『西郷と大久保』

—— たどった明治の分かれ道

「明治維新150年」にあわせるようにNHK大河ドラマ「西郷(せご)どん」が放映されています。西郷像をどう描くか、興味津々です。

小説では、おびただし西郷隆盛像のなかで、作家海音寺潮五郎の西郷像に注目したいです。彼は、鹿児島県に生まれ、西郷を尊崇する気風のなかで育ち、西郷伝を畢生(ひっせい)の仕事と自認していました。手頃な作品として『西郷と大久保』(新潮文庫)を紹介します。

この作品は、すぐれた建白書を差し出す西郷が、薩摩藩の藩主島津斉彬に見いだされ活躍します。だが、斉彬の急死による藩主久光への代替わりと、突出した行動で西郷は失脚します。2度の島流しと復活を中心に描いています。

この間、2歳年下の大久保一蔵(利通)と志を同じくして、若い藩士たちを主導し、陰に陽に助け合います。背景には、国交を求めて来航する欧米列強を前に幕府の対応への不満があります。攘夷か開港か。尊皇か幕藩維持か。公武合体か。混迷する

政治への若い藩士たちのエネルギーが沸騰します。

人々がなぜ開港にそこまで警戒し

出ていた薩摩藩の去就に各藩の目が注がれていました。

史実はこの後、薩英戦争、長州征伐、江戸開城、戊辰戦争と続きますが、この辺りはひとつ飛ばしして、新政府での明治6年征韓論(1873年)に移ります。ここで西郷と大久保が

また読んでみたい本②⑥

青年たちに

音谷 健郎



古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思います。毎月1冊ずつ紹介しています。

【西郷と大久保 表紙】

第26回は、海音寺潮五郎の『西郷と大久保』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

持されます。欧米使節から帰還したばかりの大久保は、「今は外事ではない。内治だ」と参議の職を賭けて反対します。最後は、非征韓論派に押し切られた西郷が、参議を投げ捨てて郷里、鹿児島県に帰ります。維新で藩を失った士族たちの不満を一身に引き受けて西郷は、明治10年(1877年)の西南戦争で果てます。

「理」の大久保が、「情」の西郷に打ち勝って、新政府の前途を握ったともとれます。ちょうど、ソ連で権力主義のスターリンが、理想主義のトロツキーを追い落とした状況を想起する人があるかも知れません。

司馬遼太郎に先じること20歳余の海音寺潮五郎は、史実を再現しながら人物を中心に描いたから、「史伝文学」と言われました。この作品では、西郷に代表される薩摩の気風を浮き彫りにすることで、歴史に味付けをしているように思います。旧時代の“華”に殉じた西郷ですが、明治政府の要職に残っていれば「歴史は変わっていたのではないか」と哀惜を誘います。

次回は司馬遼太郎の『翔(と)ぶが如く』です。

たかというと、中国がアヘン戦争に敗北(1842年)し、欧米列強に食い荒らされ、半植民地になった姿を目の当たりにしていたからです。鎖国下でゆっくり流れていた時間が、急流のような激しさになります。公家政界に食い込み、中央政界に踊り

袂を分かつことになります。新政府を認めない韓国を前にして、武力行使も辞さない征韓論と、今は自重し国内を固めるときだとする非征韓論が真っ二つに分かれます。小説では、西郷は自分が全権大使で交渉に行くこと主張し、征韓派に支

「比和一日一話―余滴・中編」

摘み草・木の芽摘み

摘み草は一月遅れの「桃の節供」の草餅に香を添えるヨモギ摘みに始まる。

この頃、深い雪に耐えて冬越したり、ナズナのロゼット葉も緑を取り戻し、「花ほぼろ」を手にした童たちは競って摘み草を楽しんでいた。ノビル（方言名ほいとうにんにく）、ヤブカンゾウ（方言名こまびき・あまな）も摘まれ、「ぬた」（酢味噌あえ）にして賞味され、ツクシもあれこれと調理され、食卓をにぎやかにしてくれていた。

木の芽摘みの始まりは、ミツバウツギ（方言名はしぎ）である。やがて、タラ、ハナイハナイカダ（方言名ままこな）、サンシヨウ、クサギ（方言名くさぎな）、ウコギ（方言名おこぎ）の芽が摘まれ、季節の風味として賞味されると共に、ミツバウツ

ギ、ハナイカダ、クサギなどはさつとゆでてアクを抜き、乾燥して冬に備え、サンシヨウは塩漬けにして冬の貯えとした。リヨウブの若芽やヤマコウバシの若芽を摘み、アクを抜いた後、乾燥して保存し、古くは救荒食糧として利用していた。

ワラビ、ゼンマイ、フキ採りはいうまでもなく、ウワバミソウ（方言名たきみずな）、ミヤマイラクサ（方言名めら）、ヒカゲミツバ、ヤマゼリ（共に方言名でかきぜり、後者を指す場合が多い）、ヤマソテツ（方言名やまどりかくし―叢生する大型のシダ植物、オシダなどを総称してやまどりかくしと呼んでいる）、ヒメアザミ（方言名やまごぼろ）、キクバヤマボクチ（方言名ほうこ）などが摘まれ、ワラビ、ゼンマイ、フキ、ヒメアザミは塩漬けにして冬に備え、キクバヤマボクチはアクを抜いた後、乾燥させ、ヤマブドウの葉やヨモギ同様、

著者紹介…一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

草餅に用いた。ヤマゼリやミヤマイラクサは浅漬にして利用することもある。

アケビやヤマフジの新芽は摘んで自家用の茶に加工し、利用していた。独自の風味と香があり、捨てがたい。山菜、自然食ブームにあつて、ワラビ、ゼンマイ、フキ、タラは町から訪れた心ない人たちに乱獲されているものの、田植が終わったあとで、冬の備えに、また、季節の味にと摘み草と木の芽摘みを楽しんだ風習も、子どもたちのセリ摘みの姿も、食生活の變化がめまぐるしい現代の生活様式の中で、すべて過去のこととなり、「花ほぼろ」も単に民芸品として居間の装飾となつてしまつてゐる。

カワセミのすむ川

カワセミは比和の町鳥である。中国名は翡翠、ひすいとは青緑色をした硬玉、垂涎の的となつている宝石

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

と同名の鳥である。喉の白さと胸腹の赤かつ色にもかかわらず、ヒスイと名づけられているのは、頭から背面一帯がコバルト色に鮮やかに輝くところからであろう。春を除けば二羽いることは稀で、清流の脇に羽を休める孤独な姿はヒスイの鮮やかさをより一層、鮮やかなものにする。

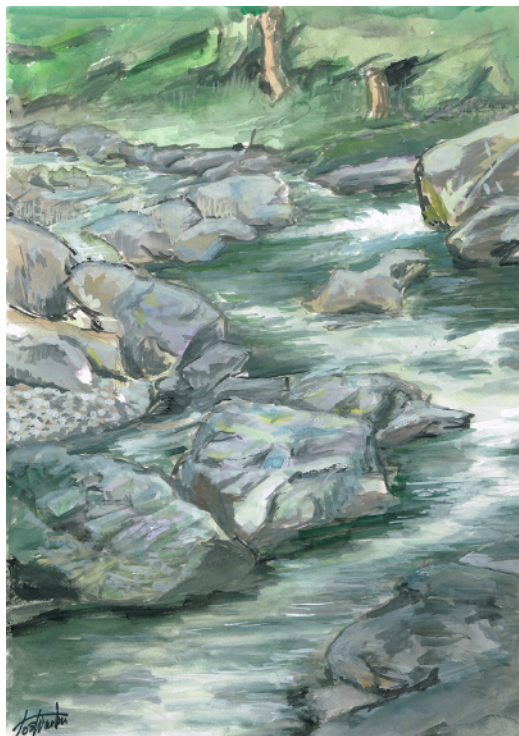
近年の農薬の乱用や乱開発は池沼や川の著しい汚濁を招き、水は死にかかつていて、そのため、かつてはどこでも水辺ならよく見かけられたカワセミもめつきり数が減つてしまった。しかし、豊かな緑に包まれ、農薬の乱用を県下でさきかけて自粛した比和は、清流を今に残すことができ、その清流に育つアユは広く知られているところであり、比和川の清流にすむ小魚を求めてカワセミたちは生き続けている。

カワセミと同じなかまのヤマセミも比和川の源流域から下流まで健在

である。ヤマセミはみごとな冠羽をもち、その冠羽を烏帽子に見たてて、やまだいゆ（山大夫―山の神官の意）と呼び親しんでいる。

比和川は江の川の源流域。清冽な水をたたえ、往時はサケやマスの遡上が見られ、秋には遡上してきたマスにそのマスの陸封型であるヤマメ（方言名ひらべ）が群れ、溪流の砂中に産卵床を作り、産卵していた。江の川の各地に堰堤が築かれて、マスの遡上が阻まれると共に、川の汚濁も加わって、昭和三十年代の初め、マスも姿は消え、ヤマメも絶えてしまった。

また、サケ科の魚、ゴギ（方言名こぎ）は比和川の清冽さを示す大切な魚である。溪流魚としてその釣の



イメージイラスト 作画は上田としのぶ氏

醍醐味は別格である。「よぼり」と呼ぶ、夜、ゴギが溪流の遅い流れの中で仮眠しているところをねらって捕らえる漁法も残り、夏の風物詩として親しまれている。

自然保護のあい言葉に「Today birds, Tomorrow men」今日の鳥は明日の我等―とある。亡びゆく今日の鳥の姿は他人ごとではない。今、歯止めをしなければ、それは人間の滅亡につながる。比和川からカワセミが姿を消し、ゴギが絶えてしまったとき清冽な比和川は死を迎えたことになる。その日を到来させぬよう、豊かな比和の自然を守り、それを子々孫々に伝える責務が我々にはある。

老いの雑記帳③

「孤独の快」

「孤独は寂しい」と言う人が居る。私は孤独で寂しいと思ったことはこれまで無かった。寧ろ孤独感が好きなのだ。人と話をすることは嫌いではないが、孤独感に浸っている時に話し掛けられるのは自分の領分を侵されるようで不快感を感じてしまう。

「人間は一人では生きて行けない」と誰もが言う。確かに生存維持の為にはその通りである。「だから…」と後に言葉が続くのだ。「だから、仲間を作れ」とか、「ボランティア活動に参加してお



互いを助け合え」とかのような、ギブ・アンド・テイクの匂いにする言葉だ。

孤独と言っても色々ある。肉体的孤独は孤立であって、人の助けを借りなければ生存持続は不可能だ。しかし、精神的孤独はその人の欲求であって生死を左右するものではない。その意味で言えば私の望む「孤独」というのは、生存を維持した上での贅沢な孤独かも知れない。

私は昔から「一人ぼっち」が好きだった。誰にも邪魔されない時間をこよなく愛していた。煩わしさが嫌いなのだ。だから集団の中に居ても時々孤独の淵に身を沈めることもあった。集団の快の中で自分だけ孤独の快を味わっていたようにも思うのだ。

ところが今は何でも話せる友を欲しくなった。超高齢者になった所為かもしれない。

「思いのままに、新・我が心の雑記帳」(鈴木澄夫著)より

「幸せ数えたら片手にさえ余る」

古い真空管ラジオから、ずいぶん昔のヒット曲が聞こえている。

「不幸せ数えたら両手でも足りない」

わたしは立ちあがって、ラジオのスイッチを切った。この歌が大嫌いだった。サチコという名前の女は不幸になると決めつけられているような気がした。そして、何よりも、自分が歌詞の通りの人生を歩んでいることが許せなかった。

ソファに腰かけて、棚から抜いてきた本を開いた。「石の趣味」、石を鑑賞するためのガイドブックだ。

別れた夫の遺骨を届けるために、中国山地の山間にある彼の生家を訪ねた。父親が応対してくれた。切れ長の目が彼とそっくりだった。あいつも齢を取るとこんな顔になったんだろうか。禿げあがった頭がよく似合っている。

「お世話になりました」

玄関を出るとき、そう言って頭を下げられた。

（本当に、世話のかかる人だった……）

帰り道で振り返ると、父親がまだ玄関の前に立ったままで、視線が合うとまた深々と頭を下げた。

（笑い顔が見たかったな）

笑うと目が皺のようになって消えてしまう。彼の父親もそうだろうか。

帰りの高速バスの出発時刻までまだ一時間以上あるので、町中を散策した。路上に出ている古本屋の立て看板を見つけて、店内に入った。こんな寂れた田舎町に、古本屋があるのが不思議だった。店舗の隣室が喫茶ルームになっていて、しばらく休

※県北の歴史や風物を題材としたファンタジー小説です。

「サチコ観音」

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 24

ませてもらうことにした。

彼は一時期、古本のセドリで稼いでいたときがある。古本屋で買った本を他所に転売して、その利ザヤを稼ぐのだ。古本の膨大な知識がないと商売にならない。

学生るときから古本好きで、神田の古本屋でアルバイトをしているうちに大学に行かなくなった。そのま

分けでもしてもらって古本屋の店主にでもおさまったのだろうか、セドリの味を覚えてしまった……。

（いろんな石があるんだな）
石のガイドブックには、さまざまに石が写真付きで紹介されている。山に似た山形石、岩の姿に似た岩形石、水がたまるようなくぼみのある水たまり石、階段状の段石、滝に似た滝石、川が流れているような流れ

形石。

その他にも、動物、人物、舟、ダルマ、仏像等々、何かにそっくりの形をした形石（かたいし）、ときには姿石と呼ばれることもあるらしい。菊花、梅花、梅林、桜花に似た模様が浮き出た紋石というのもある。

その石の種類や形状、色、紋様で、鑑賞石としての価値があるかどうかが決まるらしい。名石と呼ばれるも

のには、百万円単位の値段がつくことも珍しいことではないという。河原で拾った石が、好事家の評価を得て、名石に化けることも少なくない。（あいつが手を出しそうなことだね）

古本のセドリ、チリ紙交換の古紙回収、パチプロ、新聞の勧誘員……、いろんなことに手を出した。器用なので何をやってもそこそこ稼げてしまう。チリ紙交換では、回収した古本をセドリして、古本屋に売ってかなりの利益を上げていた。パチンコで稼いだ金でキャンピングカーを買って、全国を旅打ちしていた時期もある。しかし、いつも尻すぼみだ。

一度だけ、会社に勤めたことがある。籍を入れることになって、このままじゃ君の両親に会いにいけないと、地図を作っている小さな出版社に入社した。一週間も持たなかった。昼休みに息抜きで入ったパチンコ屋で、いつの間にか熱中して、出玉を何箱も積み上げていた。

「気づいたら夕方になっていたんだよ。もう会社に戻る気がなくなってね」
まるで悪戯がばれた子供の言い訳だ。がっかりしたが、怒る気にはなれなかった。心のどこかで、こうなることを予想していた。



旅行鞆から、白いタオルに包まれたものを取り出した。ずっしりと重たい。本に書いてある形石、いや、姿石と呼ぶ方がふさわしい。真っ黒な石で、高さは二十センチぐらい。人間の形をしている。頭部にあたるでっぱりには白い結晶成分が入っていて、上品な顔を連想させる。なかなか肩から下には無数のシワが刻まれていて、なんだか衣を着ているようだ。

彼はこの石を抱くようにして、布団の中で亡くなっていた。心臓麻痺

でしようかと、死亡診断書を書いてくれた医者と言った。

煙草のヤニが滲み込んだアパートの部屋には、他にも石がたくさん置かれていたが、すべて業者に処分してもらった。この姿石だけは特別なものに思えて、手元に残した。本当は、遺骨と一緒に彼の実家に置いてくるつもりだったが、未練があったのだろう。結局、この石の話はせずに持ち帰ってしまった。

(うん?)

古いラジオに視線をやった。あのメロディが流れている。それが旅行鞆の中から聞こえてくることに、すぐに気づいた。彼の携帯電話だ。

「もしもし……」

迷ったが、好奇心が勝った。

「あつ、間違えました」

あわてて通話を切ろうとする相手呼び止めた。

「そうですか……、しばらく連絡がないと思ってましたが、まさかそんなことに……」

電話の相手は、盆栽店を経営している店主だった。鑑賞石も取り扱っているという。

「やまちゃんには無理を言って、北海道まで石を探しに行ってもらったこともあります。石狩川の上流に、

カムイコタンという場所がありましたね。そこで採れる石は、カムイコタン石と呼ばれて名石が多く、とても人気があるんです。やまちゃん、ヒグマに襲われそうになったところばしてました」

声の印象から、死んだ彼と同年代、五十歳ぐらいだろうか。

「しかし、やまちゃんに奥さんがいるとは知りませんでした」

別れた夫と言ったはずだが、相手も気が動転しているのだろう。面倒なので、否定しなかった。

「ところで、サチコ観音はどうなったでしょう?」

「サチコ……、観音……」

声が震えている。

「やまちゃんの命名です。彼が持ってきた石の中でも最高の名品です。天然石で、あれほど形のいいものはありません。いくら出してもいいから欲しいという人がいたんですが、あの石だけは売れないと言って……」

涙が溢れだした。机の上で、観音様が微笑んでいる。

《参考文献》「石の趣味」伊藤俊治 著 (徳間書店)

まつの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL: 090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 1,5000円 >

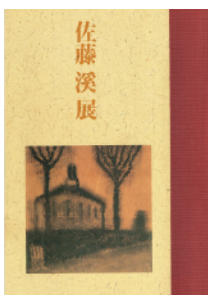


どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「佐藤溪展」

大倉宏 監修 東日本鉄道文化財団

佐藤溪は大正7年、広島県安芸郡熊野町で生まれた。徴兵で20代の半ば以上を戦地で過ごし、復員してきたときには27歳になっていた。家族の疎開先の出雲市で、旺盛な創作活動を開始。やがて、自由美術家協会展に入選したのを機に上京、公園の移動可能な小さな箱車での奇妙な生活が、新聞で紹介されたこともある。



わたしが佐藤溪に出会ったのは、大分の湯布院の小さな美術館。シャーマニズムを思わせる油絵や詩情あふれる水彩画に幻惑された。そして、心の奥深くが共鳴した。「人生の悪趣味とは与えられた天賦すら大切にしていないこと」、詩や文章も味わい深い。

「ハイペリオン」

ダン・シモンズ 著 ハヤカワ文庫

SF超大作。人類が地球を脱出して約800年が経過した28世紀、人類はさまざまな惑星に進出、200以上の惑星による連邦制の統一政体を築いていた。舞台は辺境惑星の「ハイペリオン」。古来から人々の畏敬と信仰を集める謎の建造物「時間の墓標」の調査に、連邦は7人の男女を巡礼として派遣する――。



壮大なスケールに、圧倒されてしまった。それぞれの巡礼者が遠征に参加した経緯が、章単位で描かれている。魅力的な主人公が7人いるようなものだ。分厚い本だが、少しも長さを感じさせない。わたしの読書歴の中でもベスト3に入る傑作&快作。全4部作の中でも最初の本が一押しである。

「カムイ伝」

白土三平 著 小学館

強固な身分制度の江戸時代、非人部落に生まれたカムイは、自由を求めて強さを求める。天分を認められて忍となり、才能を開花させるが、次第に非情な任務に疑問を抱くようになる。主人公はカムイだけではない。下人から本百姓になり領民の幸福のために才能を発揮する正助、姦計により家門が断絶、非人部落に潜伏する草加竜之進、白いオオカミのカムイ等々、壮大な群像劇なのである。「ヴィジュアルは映画を凌ぎ、ストーリーは小説を越えた」、刊行時のキャッチコピーは大げさではない。第一部、第二部、外伝の全38巻の不朽の名作。どら書房の漫画ルームで読むことができます（中村慎吾氏寄贈）。



どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どろろくろ俳壇

脱獄者鬼さんこちら山笑ふ

近藤 昌平

追伸に千島蒲公英咲きました

原博己

花の雨思いもかけぬ訃音かな

片岡 正人

目印は庭先に咲く利休梅

隆愚

初めまして?お帰りなさい燕どの

赤川 冬人

投稿&寄稿

「記念切手の話」

M・A

固定電話が鳴ると、妙に緊張してしまう。携帯電話を使うことが多くなって、その分、固定電話でやりとりすることが少なくなっているからだろう。たぶん、押し売り電話だな、と思いつつも、電話口に急いでしまう。親戚の訃報などの緊急連絡が入ることもあるからだ。年齢層の高い人は、いまだに固定電話を使う。主人さままでいらっしやいます

か?」

それで半分、安心して、半分、腹立ちを覚える。最近、電気料金に関するセールスの電話が多い。太陽光発電だったり、取次会社の変更だったり。必要ありませんと断言して、即座に電話を切る。

この電話での押し売り、法律で禁止できないものか。忙しいときにこの手の電話がかかってくると、いらだちがしばらく残ってしまう。

押し売りではないが、買取りの電話がかかってくることもある。切手や記念硬貨の買取りで、私は相手に

しないが、以前に一度だけ近所の人に誘われて、買取り業者の訪問を受けたことがある。わが家には、父親が遺した切手が大量に残っている。

業者の話を聞いて、やっぱりなと思ってしまった。買取り対象はシートの手で、状態の良いもので額面の八割。それほどに、日本の記念切手の価値は下がってしまった。

私が小学生の頃は、切手の収集家が多かった。私も切手少年で、学校にこっそり切手帳を持ち込んで、枚数が多いものを他の切手と交換していた。売ってくれと懇願する者もいて、私の小銭入れは硬貨でパンパンに膨れ上がっていたという記憶がある。

最新の切手ガイドの本が必需品で、すべての切手の「時価」が記載されていた。切手趣味週間シリーズの「月に雁」や「見返り美人」が高額で売買されていて、切手少年たちの憧れだった。私が持っていた切手の中で一番時価が高かったのは、「写楽」だった。

買ったらずくに値段が上がるのだから、郵便局の記念切手の発売日には長蛇の列ができた。売り切れで買えなかった人もたくさんいた。子供のわたしは、シートで買うお金は

持っていないので、三枚ぐらいが精いっぱい。それでも、その日に並んで買わないと、もう額面で手に入れることができない。デパートの切手売り場が盛況だった時代である。

私が高校を卒業するころには、切手ブームもすっかり下火になっていた。郵政省も打ち出の小槌を使わなくなった。見境なく記念切手を乱発して、国内外の収集家からそっぽを向かれてしまった。

私もすっかり熱意を失って、切手帳を残して家を出たのだが、それを手にした父親がすっかり切手収集に嵌ってしまった。それがまた、私の手元に遺された……。

原価を切つてまでたたき売るのは業腹である。こうなったら、本来の切手として役目を全うさせてやろう。しかし、これを全部、郵便で使うとなると、死ぬまでに全部、使い切ることができるとかどうか。



「幻の神福寺」

じんぶくじ

第五回 文責・寺岡隆行

亀の報恩の話

三谷寺を建てた禅僧弘濟（ぐさい）にまつわる亀の恩返しの話が、「日本霊異記、上巻第七」にありますので、参考に供します。

禅師弘濟は、百済国の人である。百済国が戦乱の時の事、備後国三谷郡の大領の先祖の人は、百済を救うために、つかわされて、軍（いくさ）をしてめぐった。その時、誓願を起こしていった。「もし無事に帰りおおせたならば、神々たちのために、伽藍を造立しましょう」と。ついに、災難をまぬがれた。そこで禅師を招いて、一緒に帰ってきて、三谷寺を造った。その禅師が、そんなわけで伽藍を造立したので、多くの寺よりもすぐれ、僧も俗人もこれを見て、いっしょにつつしみうやまった。禅師は、尊像を造るために京にのぼり、財物売って、金や丹（に）（朱の顔料）などの物をすっかり買い終って、帰

りに難波の津に着いた。時に海辺の人が、大きな亀を四匹売っていた。禅師はその人を教え導き、亀を買い取って放してやった。そこで人の船を借り、童子二人をつれて、いっしょに乗って海を渡った。日が暮れて夜が深まると、

船乗りが欲を起し、備前に行き着くと、骨島（かばねじま）の近くで、童子たちを捕えて、海の中に投げこんだ。そうしたあとで、禅師につけていう。「さつさと海にはいれ」と。禅師がさとし導いても賊はやはりゆるさない。そこで禅師は、願いごとをして、海にはいった。水が腰に達した時、石が足に当たった。その夜明けにそれを見ると、亀が石を背中に乗せている。さて、備中の海浦の海岸近くで、その亀は三度頭を下げて去った。おそらくこれは放してやった亀が、恩に報いたのであろう。

時に、賊ども六人が、その寺（三谷寺）に金や丹を売りに来た。檀越（だんおち・檀家の者）が先に応対して値踏みをし、禅師があとに出て会った。賊どもはあわてて、どうしてよいかわからな

い。禅師は賊どもをあわれみ、刑罰を加えなかった。

仏を造り塔を飾り、供養が終わった。のちに禅師は海の近くに住み、やって来る人を教化して、年齢八十歳あまりで亡くなった。

畜生でもやはり恩を忘れずに、恩を返し報いる。まして、義理をわきまえた人間が、どうして恩を忘れてよいものであろうか。

以上、庄原市宮内町にある伝神福寺の証拠資料と関連記事について、いろいろな文献を頼りに纏めました。お気づきの点がございましたら、ご教示願えれば幸いです。

庄原市職員で考古学に造詣の深い

方の中には、伝神福寺の発掘調査が実現される事を望んでいる方が居られます。地元といたしましても、弥生時代の四隅突出型墳丘墓が発見されたり、永江の里の地名の発祥の地でもあり、古くから人々の住んでいた由緒ある地域を大切に守り、後世に伝えて行く責務があると考えます。一緒に保存や研究をしたいと思われ

る方のご協力をお待ちしています。

庄原市文化協会加盟登録団体 宮内・永江の歴史研究会 寺岡隆行
〒727-0007 庄原市宮内町
91番地
電話&FAX
0824(72)2793



三次市和田地区にある廃寺跡。塔の心礎石は、推定三谷寺の跡と伝えられている。（講演会「タイムスリップ 寺町廃寺」の添付資料より転載）

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

ー 絵本の無料レンタル ー

イベントや集会の時などにお使いください。
「箱貸し」します。
図書館の除籍本や販売には難のある本ばかり
なので、破損しても大丈夫です。

陶芸 教室

洲澤陶芸教室 (電動ロクロほか成形全般)

- ・ 県大前教室 (0824-72-0686) 月謝 2,000 円
金曜日 (毎週) 午後 1 時～4 時 30 分
 - ・ 敷信自治センター教室 (0824-72-0571) 月謝 1,000 円
木曜日 (第二、第四) 午後 1 時～4 時 30 分
 - ・ 庄原小学校前教室 (0824-72-1074) 月謝 1,000 円 (月2回)
月曜日～水曜日 (希望する日) 午後 1 時～4 時 30 分
- ※詳しくはお電話ください。0824-72-1074 (夜間を希望)
洲澤悦二 (庄原市西本町 2-11-19)

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
 - 教室&講座案内
 - イベント情報
 - あなたの大切な本の紹介
 - ボランティア・ライター (現地記者) 募集!
- ※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>



出版案内 「和解の関」篠崎敏(しのざきさとし)作

日本図書刊行会発行、近代文藝社発売 (2017年4月)

人間関係の機微を描いた3作品を収録。表題作の「和解の関」は、原爆被災者の従兄とのこじれた関係を描いて、被災者の人生の過酷さをも伝えている。視力を患っている作者は、夫人による口述筆記で執筆。1980年「未完の絵」で小説新潮新人賞受賞。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail: touzin@sannet.ne.jp
年間購読料: 2,000円(郵送費込)

誌面デザイン: ROUTE183
協賛: 九日市愛好会

編集後記

◇ 群星伝の武田祐三先生に取材の依頼をしたところ、少し前にうちの店(どら書房)に来ていただいたりしていることがわかりました。店を始めて、こういうことがよくあります。それだけ、わたしが郷里のことを知らないという事なのでしようね。

◇ 群星伝で紹介した武田先生の三冊の本は、庄原の小池書店で手に入れることができま

◇ 我が家の飼い猫ドラマ、長い冬を乗り切ってます。元気が。以前は野良だったので、屋内の寒さぐらいへっちゃら。すっかり仲良しなのですが、今の時期は抜け毛で、抱くと衣服が毛だらけになってしまいます。

第208回 「しょうばらくんちいち」 「庄原九日市」

平成30年 5月9日 (水) 9:00~13:00

ROPE 庄原九日市とは？

天正年間（440年前）に物々交換で始まった市（いち）。
昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活。

ROPE TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

→パッチワークと染
5月8日（火）～10日（木）10時～16時

★風龍

→九日市スペシャル！餃子200円！

★どら書房

→月曜日と火曜日はお休み

★楽笑座で「まかない食堂」「うた声喫茶」開催中。

ROPE 出店配置図



1 お休み

2 ギャラリー三村

3 昭助
とらち
二八そば加工所
アーミッシュ
さだっさ
佐藤食販
健康企画グループ

4 郷屋

5 ちくちくはうす玉手箱

工房アム
かぐや姫
6 ROOM OF KEIKO
めだかの学校
やまのおみやげや
7 農楽会

8 タツミ矢
アパレルゴトウ

9 まなべ商事

10 克國水産

11 お休み

12 お休み

13 山本水産
くんえん工房 香豚
ハナビラタケ広島
花田FF

14 開盛社
オレンジランド

15 宮川屋
田崎屋
砂田海産
佐藤園芸
珈琲屋スプレモ

16 お福

出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内 TEL/0824-75-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

